

# 栄光の中大野球 再び 最後のシーズンに燃えるキャプテン

阿部 慎之助 捕手 (商4)

「アマNo.1 キャッチャー」「ドラフトの目玉」——そんな形容詞が常について回る阿部 慎之助 捕手 (商4)。そんなスター選手も中大での野球人生は決して平坦なものではなかった。今秋行われたシドニー五輪では“大学球界きっての強打者”として日本代表メンバーに選ばれるなど、数多くの国際舞台を経験している。しかし、彼が中大野球部に入った時は、東都2部リーグでの低迷が続いていた。昨年春、10年ぶりに1部に復帰したものの、勝ち点を1つもとれずに再び入替戦に出席。残留を決めた今シーズンは一転して優勝争いの一角を演じるなど、とにかく舞台は目まぐるしく回った。

4年生最後のシーズンを迎えた阿部選手に、「私の野球観」を思いきり話してもらった。  
(学生記者・玉井安子、杉村麻衣子)

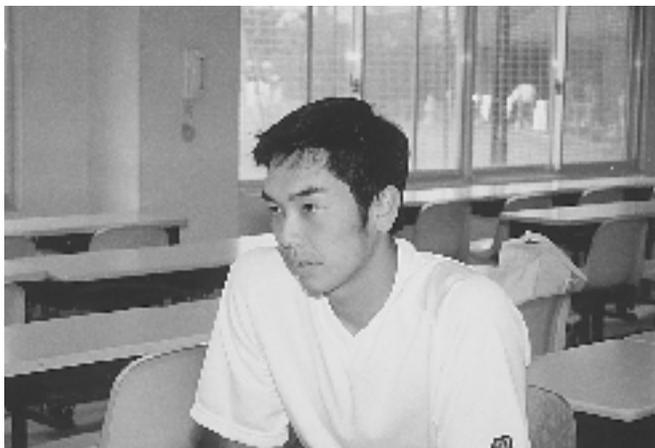
## なぜ、中大を選んだか

小学生の頃、プロ野球選手に憧れる子は、たくさんいるだろう。阿部選手もそんな夢を持つ1人だった。特に父親がやっていたので、幼稚園の年長の頃にはボールを握っていたのを覚えている。いいかえれば、きわめて自然に野球の世界に入り込んでいったのである。

しかし、何年か続けるうちに大半の子供は、文字どおり“夢”に終わってしまうが、彼は違った。すでに中学生の時には、野球人生を歩もうと決めていた。キャッチャーというポジションを選んだのも、この時だった。同じキャッチャーをやっていた父親から、いつも話を聞かされていたからだ。「司令塔のように、自分のサイン一つで、全体を動かす」キャッチャーの役割に、彼

はしだいに魅せられていった。

そして、中学からの夢を胸に、都内の私立安田学園に通う。この時期、年に1回ぐらいいは野球が嫌いになっていた。「練習以外のウェイトトレーニングが特にきつかった」という。甲子園には出場できないし、「もちろん、目標には掲げていたんですが、結局はそんなチームじゃなかったんですね」。1年からずっとマスクをかぶり続けた彼のもとへ、プロからの誘いもあった。それも断って、彼が中大に進んだ理由とは



……。「実は父が中大のOBだったんです。その父親から、いま2部の野球部が1部に上がる喜びを、ぜひお前に味わってほしいといわれ、即座に決めました」。

父親の東司さんが在学していた当時、中大は1部の全盛期だったが、彼の入学時には、すでに2部に落ち、長い低迷期に入っていた。彼は中大を1部に引き上げるために大きな役目を背負わされることになった。

しかし、彼の野球人生において父親の影響が大きいように思われるが、別に干渉されているわけではなかった。「野球に対するアドバイスを受けていたのは、高校1年生ぐらいまでで、あとは、こういうものもやってみると言われましたが、決めるのは自分ですからね」ときっぱり言った。

## 入替戦が東都のレベル維持

中大へ入っても1年生からマスクをかぶった。その年の春、2部で優勝したが東洋大との入替戦に敗れ、翌年春も2部優勝をかけた国士館大とのプレーオフ戦に敗れた。その一方で、彼は全日本の代表に選ばれるなど、1年生から数多くの国際試合にも出場した。

また、去年は横浜ベイスターズ、ことし2月は、日ハムのキャンプに参加した。プロの練習メニューは、トレーニングの道具や設備がしっかりしていて、とても充実した内容だった。部に帰ってからも、その中で使えるところは取り入れている。

そして3年の春。ついに悲願の1部復帰を果たした。3度目の正直だった。「キャプテンをはじめとする4年生たちが頑張ってくれた」と語る。しかし、その喜びも束の間、晴れ舞台での最初のシーズンは1勝10敗で、勝ち点を1つも取れずに終わってしま



い、再び入替戦に出場する羽目になった。

入替戦は1部昇格をめざすチームと、2部落ちだけは避けたいチームの意地のぶつかり合いだけに、息詰まるような独特の雰囲気がある。この入替戦という制度が東都のレベルを維持しているともいえる。「1部のレベルがやはり高かったのか」と彼に尋ねたら、「いや、そんなに変わらないんですけどね。ただし、ここという肝心なところで、弱さが出ただけでしょう」と振り返った。

再び入替戦を制し、1部残留で迎えた春のシーズン。キャプテンになった阿部選手は、人間性の向上をチームメイトにうるさく注文した。例えば「言葉のキャッチボールをしよう」「よしいこう」と、きわめて普通の会話であるが、それが出来ていなかったからこそ、2部で長いこと低迷していたのではないかと思った。リーグ戦開幕を前にして、チームは優勝を目標に掲げた。入替戦だけは免れようとする、マイナス思考になってしまう。とはいっても、戦力的に弱いという事実は否めなかった。

しかし、いざフタを開けてみると、本人たちも信じられないような快進撃が始まった。開幕の対駒大戦。初戦は2年生の古岡選手、2戦目は3年生の橋本選手で連続完封勝利を収めた。実に23季ぶりの勝ち点を挙げて、チームは勢いに乗った。翌週の日大戦も2連勝、続く2季連続優勝の青学大との試合も初戦に勝利し、開幕5連勝を果たした。この青学大戦は2戦目こそ負け

たが、最終日に勝って、3つ目の勝ち点を挙げ、中大は21年ぶりの優勝へと近づいた。

そして、天王山となった対亜細亜大戦。初戦は中大が序盤でリードを奪いながらも、8回に逆転され、その裏に追いついて延長戦にもつれ込んだ。そのまま両チームとも得点できず、延長15回引き分けとなった。この引き分け試合をもののできなかったところが、優勝を逃がしてしまった最大のポイントになった。このあと、1勝1敗までもっていくが、最終的には勝ち点を落とし、東洋大戦でまさかの連敗を喫して、21年ぶりの優勝はならなかった。あの引き分けがすべてだった。

---

## 忘れられない試合

---

阿部選手はこのシーズンを「そんな強くないのに、勢いで勝ち進んでしまったところがあった。最後は負けてよかったとはいわないが、もう一度改めて1部の厳しさを知ることができた」と振り返った。

苦しかったこと、嬉しかったこと、いろいろなことがあったが、いまでも忘れられない試合がある。阿部選手が2年生のときの2部秋季リーグ。相手校は東洋大。全勝同士で迎えたこの対戦は事実上の決勝戦だった。初戦、1対1で延長にもつれ込んだ10回裏、二死一、二塁の場面で、中大は満塁策をとった。そして次打者への最後の1球　インコースのストレートは、わずかに外れた。

「あれはストライクといっても、いいところだった。あまりにも悔しくて、ミットを地面に叩きつけたことを、いまでも、はっきり覚えている。寮に帰っても何もする気になれなかった。いつもならバットも手にするし、ミットも磨いて手入れをするのに……。結局、東洋大が優勝し、立正大との入替戦で、勝利して1部昇格を決めただ

けに、悔しさはなおさらだった。しかし、「あの時は、鈴木裕二投手（当時4年生）の方が、よほど悔しかったと思いますよ」と、静かに振り返った。

スタンドの応援の話になったら、「よその学校の話ですけれど、一般学生の応援が多い学校があるけど、あれはどうしてですかね」と、逆に聞かれてしまった。試合が平日だからという事情もあるが、確かに中大生の応援は少ない。阿部選手の話によると、授業中に先生が神宮へ行くことを呼びかけたり、極端な例では学校が休みになる場合もあるらしい。いずれにしても、学校が協力している部分があるかないかは、学生やチアリーディングなどの応援を見ればわかるという。

今春のリーグ戦。首位攻防戦だった5月3日の対亜大戦のスタンドは、約1万人のファンで埋まった。「それに、中大は昔からのファンが多いらしいんですよ」と、阿部選手は教えてくれた。

---

## 試合前に緊張しておく

---

ここで、チームの司令塔・阿部選手に、野球における自分の性格を分析してもらった。

「A型だけど、かなりアバウトです。リード面でも、打たれたらどうしようと思うと打たれるんで、開き直ることが多い。同点までは、あげていい点はあげて、ここはあげちゃいけないと思ったら、きちっと止める。僕らがリードしているんだったら、同点のランナーまでは入れていいわけじゃないですか。そういうことを野手に言って開き直らせるんです。守りにしても大丈夫だと思って守っているのと、絶対ダメだと思って守るのは違うと思います。要は負けなければいいわけですからね」

さり気ない話し方は、なかなかどうして、

かなり度胸派のように映ったが、本人は「少しも度胸がある方だとは思っていない」といった。そこで、阿部流の対策法は「試合前にわざと緊張しておくこと。そうすれば試合が始まって、それ以上に緊張することもない」。緊迫した入替戦や世界選手権で、生の雰囲気を経験しているうちに、身についたものの1つだ。ゲームに対する冷静さ、集中力を持続させることも、徐々に備わってきたという。

大学生活は、とにかく野球漬けの日々。週7日、毎日練習があり、休みは2週間に1回ぐらい。たまの休みには、だるい時は寮にいて、それ以外は実家に帰るぐらいだ。阿部選手は年子の姉さんと妹の3人きょうだいの真ん中で、非常に仲が良い。いま、



一番やりたいことは「自室でボートとすることだそう。日頃の試合ぶりからみれば、とても阿部選手とは思えない言葉だが、それだけ忙しいのだろう。

野球の練習環境については意外！ 都心から離れていること。逆に遊んでしまわないことが、いいのだそう。「学校のグラウンドは最高です」。第2体育館の側にあるグラウンドは教室から離れていることもあって、人はあまり来ない。いくら彼が話題の選手であっても、その反応はあくまでクールだった。

とにかく「野球を始めた当時の初心を忘れずに野球を続けていきたい」という。あこがれのプロ野球選手も、とくにいない。「ヤクルトの古田捕手をはじめ、ほとんど

のキャッチャーを尊敬しています。自分の野球がすべて正しいとも思っていないので、いろいろな人のいろいろなところを参考にしています」。

「野球は好きでやっているわけです。それ以上でも以下でもないんです。なんで野球をやっているのかを考え、やっぱり好きだからやっているんだということ、自分のなかで強調していきたいです」。

私たちの目には「阿部選手は過信することもなく、慢心することもなく、自分の姿がはっきり見えているんだな」というように映った。

「中大は、なぜ学生の応援が少ないのか」。学校を休んで神宮に足を運ぶ都度、私もずっと感じていました。一方、中大はオールドファンが多いと聞いています。「伝統校はたとえ、それが昔の偉業であっても、ずっと変わらずに応援してくれるのだな」。スタンドで応援している後輩として、改めてOBの皆さんに感謝と連帯の気持ちを感じています。

しかし、選手にしてみれば、やはり「教室で机を並べる学生にも、もっと見てほしい」と思うのではないのでしょうか。阿部選手にインタビューして、きくと、彼もそう思っているに違いないと思いました。今後の野球部の頑張りに、私たち一般の学生も応援、「中大」を盛り上げましょう。（玉井）

## インタビューを終えて

中大の春のシーズンは快進撃のスタートだった。私はその時、神宮球場の応援席にいた。阿部選手が打席に立つと、学生風の青年が「阿部っち、いけるぞ」と叫んだり、OB風のおじさんが「阿部ちゃん、頼んだよ」と声を張り上げる。スタンドの視線を一身に集めて歩く姿は、遠くから見ても存在感を感じた。

今回、その阿部選手に間近で会った。静かで落ちついた雰囲気は、こちらの方が思わず緊張してしまう。話し方や表情を見ても、グラウンドのそれと少しも変わらない。

「必要なものと、そうでないもの」が整理されているような阿部選手の言動は、私にはとても真似のできない芸当だと思った。（杉村）